

## 一九二〇年代と孫文にみるアメリカとの共生志向

中村 哲夫

はじめに

一 孫文と旧モリエール路の寓居

二 孫文とアメリカ文明

むすび

はじめに

一九二〇年代を、孫文は半分しか生きていない。その半ばの一九二五年三月二日、六〇才の生涯を終える。とはいえ、中国革命へのその燃焼は、二〇年代というわずか一〇年、かれにとっては五年間と限定された時間の枠組みをはるかに超越したものであった。狭くみても、一九二〇年代という時代の中国の羅針盤は、孫文ぬきには語れまい。孫文と国民革命の時代であった、と総括することも許されよう。

一九二〇年代、今日からみると、それは両大戦間と定義づけられる過去の静的な図式におさめられる、単なる一定の時間枠にしかすぎない。しかしながら、その時代に生きたひとびと、とりわけ孫文と新たな中国の勃興を志す人た

ちにとつては、世界秩序の劇的な変革期と意識される状況がうまれていた。とりわけ、大英帝国の落日とともに台頭してきたアメリカの勢いと、新しい星であるソビエト・ロシアの誕生が拓く可能性とに、かれらは少なからず魅せられていたに違いない。なかでも、連ソ政策が色濃くなることをもって、二〇年代の孫文の国際観が特徴づけられる。孫文は、その連ソ政策を変更しないままに生涯を終える。したがって、連ソ政策をもって二〇年代の孫文の国際観を象徴することも可能である。

ところで、先覚者としてのかれの自負にその政治選択の是非を照らせば、今日どのように評価しうるのだろうか。二〇世紀の末に近い今日の時点から批評すれば、連ソ政策は先見の明と叫ぶだろうか。その答えは、肯定的な評価へと容易に落ちつくまい。かりに、かれの選択がソビエト・ロシアとの提携にのみあつたとするなら、孫文の「先知先覚」は短い時間枠のなかにおいてのみ成立する。けれども、かれの知的な思索活動をふくめて評価すると、その生涯をついに連ソ一辺倒で閉じたとは鮮明に論断しえない。孫文のうちには、アメリカの文明進化によせる期待も他方に存在したようである。アメリカとの協調関係が、新たな中国の勃興に必須条件とみる考えも伏線として存在していた。かれの死後、孫文の内に同時に内在したこのような柔軟な国際観と独特の文明進化論とが、継承者を自認する人達の左と右への分裂を深めるよう作用し、それぞれの側に一面的な国際観が「路線」として定式化される。容共の孫文像と、反共の孫文像とが深刻な対立を生む。けれども、一九二〇年代という時代の特質にたいし、孫文がどのように関わったのかを再検討するなら、容共の孫文像も、反共の孫文像も、それぞれに一面の強調にすぎないという評価におのずと落ち着くと思われる。

本稿の主題は、孫文における二〇年代は、俗にいう連ソ一辺倒ではなく、かれの思索の内面では親アメリカ的な文明観が成熟し、その完成度を高めることに傾倒していた時代である、と論証することにある。その解答を求めるには、

まず最初におおまかな整理が必要であろう。孫文のなかで、連ソと親アメリカとは、同じ位相における楯と矛の、併存の許されない二者択一の命題であったのだろうか。中国政治が連ソ路線と親アメリカ路線との二者択一を迫られたのは、第一次国共分裂期とより後世の第二次大戦のあとの局面である。一九二〇年代においては、アメリカの対ソビエト政策は、ロシア革命直後の敵対的な対応からシベリア出兵へ、そして撤兵、さらにはロシア経済への協力と、各時期に応じ変化を遂げる。第二次大戦の終結の直後にいたるまで、米ソは対決より協調の時期のほうが長かった。第二次大戦のあと、朝鮮戦争の前夜に米ソの非和協的な対立関係が生みだされる。内戦期に、連ソの孫文像と親アメリカの孫文像とが、同じ位相における矛盾した、二者択一の政治命題として、中国の政治世界を二分する。しかし、われわれが追体験しようとする一九二〇年代という時代は、大英帝国の落日、アメリカの隆盛、新しい星であるソビエト・ロシアの誕生を特質とする時代である。連ソと親米とは、国際政治という同じ位相においても両立しうる命題であった。もっとも、孫文にあってはそれらは位相の異なる命題でもある。すなわち、国際政治の力学世界での連ソ路線の選択と、人類文明の進化にかんする学的な思惟としての非マルクス主義の道の選択とはそもそもが位相の異なる課題である。孫文の選択にたいし、第二次大戦のあとの現実政治の要請や、あるいはソ連共産党の瓦解ののちの現代からの断罪は、ともに避けなくてはなるまい。むしろ、孫文の内にある学術的な思索を復元するなかで、その解答を採ることとしたい。すると、その解答は、まずはかれの読書生活と蔵書のなかにこそ求めなくてはならないだろう。

上海の旧モリエール路、今の香山路にある孫中山故居にかつて保管されていた孫文の蔵書の旧目録（内部発行本）の修訂のため、上海市政府の機関に厳重保管されている原本を査閲する機会が幸いにも筆者に与えられた。<sup>1</sup>そこで得られた資料を基礎とし、孫文における一九二〇年代という時代の深層と、かれの知識の地図である蔵書構成とを探索することにしたい。

孫中山故居の蔵書は、総計一九三三種、計五三三〇冊、使用言語は、六種（漢、英、独、仏、露、日）である。その特色は、英文が極めて多く、その他はかなり少ないことである。欧米言語のものは、一五二八種、計二〇二九冊に對し、漢語は三八九種、計三一四三冊、日本語のものは一五種、五八冊である。欧文書籍を内容により分類すると、百科全書・年鑑、二八種、政治（附 法律・軍事）、四八四種、経済（附、鉄道）、二四七種、社会、二〇三種、哲学（附、心理学・宗教学）、五四種、科学・技術（附、医学・体育）、一〇九種、天文・地理（附 地図）五五種、歴史一一六種、語学・文学（附 伝記）、一七〇種、定期刊行物、六二種となる。筆者が新たに定めた分類である。イギリスの大英博物館の目録（B.M.と表示）とアメリカの連合目録（C.N.C.と表示）とを対照しながら再編集したのが、『上海孫中山故居蔵書目録』（汲古書院、一九九三年）である。その大部分の書籍は、英米の主要図書館が所蔵するものである。上海孫中山故居蔵書の保存と稀書の摘出のため、英米の主要図書館蔵書目録との対照資料を併記するのが本目録の特色である。その結果、孫文の英文書籍に関する選書眼が自らがけた「格物致知」の徳目に恥じないものであり、その知的な志向がアメリカ的色彩を帯び、西欧の色彩を帯びていないことが窺える。以下、行論の都合より『上海孫中山故居蔵書目録』を典拠とすることが多いので、それに基づく資料は、本文のなかにに符号「<sup>①</sup>」で示す。上段に『目録』の頁数、下段に蔵書の管理番号である上海孫中山故居蔵書「書号」（いくつかの空号があり、番号があっても対応する書籍がなく、書号と総冊数とは一致しない）を注記し、書誌資料の相互対校の便をはかる。<sup>②</sup>

## 一 孫文と上海旧モリエール路の寓居

孫文にとり、上海旧モリエール路二九号の寓居は晩年の生涯を安全に護り、静かに思索するための最も恵まれた安

住の場所であったと思われる。かれがそこに居を構えたのは、一九一八年の六月二十六日からである。ロシア革命の成功が伝えられてから、さして多くの時間が過ぎ去っていない。それ以前、上海では環龍路に仮寓を設けていた。孫文は、その日、広州の非常国会において大元帥の職を辞任し、スワトウ、台湾をへ、「近江丸」に乗り神戸を経由し上海へ戻ってきた。この日より、モリエール路の寓居はかれにとり広州への出陣の基地であり、また国際外交工作の拠点ともなった。かれがこの寓居で過ごした日数は、全生涯のなかでさして長いものではない。第一次の逗留は、一九二〇年一月二五日まで、第二次のそれは陳炯明の反乱を逃れ、上海へ帰還してきた一九二二年八月一日から翌二三年二月一五日までである。そして北上の途上、最後の来日となった一九二四年の十一月の神戸への渡航の前夜の一月一七日から二二日までの六日間であった。通算すると、三年には満たず、二年一ヵ月と六日となる。六〇年の生涯の二〇分の一にも及ばない。けれども、ここに居住した時間の短さにもかかわらず、質的には最も熟成した読書と執筆の機会に恵まれたのがこの寓居での生活であろう。

孫文の生涯を代表する著述をひとつに限定してあげるとすれば、おそらく専門の研究者のあいだでも見解が二分されるに違いない。講義録である『三民主義』をあげるか、かれ自身の著書『建国方略』を代表作とするか、にわかには決めがたい。仮に『三民主義』とするならば、その講義が広州で行われたから旧モリエール路の寓居とは関連しないようである。しかし、早くも一九一九年に孫文は「三民主義」という標題の小論文を執筆している。これは、非常に短い文章であるけれども、後の『三民主義』講演の骨格がすでにここに完成していた。この「三民主義」という標題の小論文は、旧モリエール路の寓居で書き下ろされたものである。<sup>③</sup>

『建国方略』は、心理建設、物質建設、社会建設の三体系からなる。その心理建設の基となったのは『孫文学説』（一九一九年）、物質建設の基には先に『The International Development of China』と題し英文で発表され、後に中

文訳された『実業計画』（一九一九年）、社会建設の基には『民権初歩』（一九一七年）がすでに準備されていた。中国哲学史上で孫文の独創とよべるのは、『孫文学説』の知難行易説である。この『孫文学説』の執筆、印刷、校正などの作業も旧モリエール路の寓居で行われたことが、『孫文学説』巻一白筆ゲラ刷り一〇八葉〔128/C57〕の存在からみても確実である。もっとも、『建国方略』に盛り込まれた思想の端緒は、一九二二年の南京の中華民国臨時政府の大總統就任時期からの言論にみられる。しかし、本格的な思索としては、一九二三年の八月、第二革命に敗れ日本に亡命して以降のことであろう。

この時期より、孫文は日本の書肆、主として洋書肆の丸善から英文図書を盛んに購入している。興味深いことに、丸善から孫文への書籍代金の請求書が史料として今日に伝わっている。宛名は、「中山様」あるいは英文で「Mr. Nakayama」とある。それらは、萱野長知のもとで保管されていた。それを宮崎世竜氏が筆写し、そのコピーが久保田文次教授の手元にある。それを検討すると、一九一四、一五年の両年にまたがり、合計二十三通ある。この分の書籍代金も相当額に達したようである。ちなみに、一九一五年五月一日の丸善から「Mr. Nakayama」への英文レターでは、「先月末締切の未払い残高は、六三円六五銭」に達する。判明する書籍のタイトル数は、一四八件。これを上海の孫中山故居の蔵書目録旧版（内部発行本）と書名を対照した姜義華教授の報告によると、いくつかの書籍が失われているとのことである。その言によると、孫中山が広州へ携行し、陳炯明の反乱に遭遇し、その砲火により紛失した、と推定されている。その推定が正しいとするならば、広州での災難で焼失した書籍は、孫文の当時の思索に深く関与していたと推察される。そこで、丸善の請求書にある書籍のうち、現在、上海の故居蔵書として保管されているものと、孫文が広州へ携行し陳炯明の反乱に遭遇した際に焼失したと推定されるものとを検討してみる。すると、まず気付くのは、日本語の書籍がほとんど現存していないことである。著者不詳の『進化論講話』、『国法学』第二（行

政編)上、下のほか、日本建築に関する専門書七種が現存していない。つぎに、Home University Library of Modern Knowledge シリーズの文庫本は、Moore, G.E. の Ethics [66/1491] をはじめとし、その現存の度合いは高い。特筆するとすれば、この時期にベルグソンの哲学への関心が深いのに、それに関するものの一部しか孫中山故居蔵書に残されていないことであろう。例えば、Russell の The Philosophy of Bergson および Ray の A New Philosophy: Henry Bergson もそうである。ベルグソン哲学との接触については、姜義華教授が示唆するようにあらためて深い検討を要する哲学史の問題性をはらむ。その他、この時期、ドイツの歴史と情報に関するものの書籍が五点あり、さらに蜜蜂の飼育、その農業経済面での利用などの参考書が四点も購われており、それらはいずれも現存している。丸善からの購書の習慣は、日本亡命を終え、上海の環龍路の仮寓に住んでいた時代にも持続している。筆者による原本照合の作業の際、丸善から送られた「支那上海環龍路六二号、孫逸仙様」と表書きされた新刊案内の郵便葉書を現認している。消印は大正五年一月一〇日である。つまり、一九一六年のことである。原本照合の作業の際、先の萱野長知文書にある請求書に記された書籍以外にも、相当数の丸善からの購入書があることを確認できた。それらには、取扱いの書店のシールが添付されているものが多数あり、入手先が特定できるからである。書肆のシールからみると、丸善からの購入が最多を占めることはいうまでもない。

『実業計画』に示されるように、鉄道建設を主体とする経済学への傾倒も、臨時大總統時期からのものである。臨時大總統の地位を袁世凱にゆずり、孫文は鉄道建設推進を民生主義実現の要とし、各地で講演活動を行い、一九二二年九月九日に袁より全国鉄道の全権を委嘱されている。中華民国の元年からの読書と思索の集積として、旧モリエール路の寓居における述作の熟成期を迎えることになる。寓居に残されたかれの経済学関係などの蔵書は、孫文の完成期の思索内容を物語る貴重な資料である。そこで、その蔵書につき、いくつかの基本的な問題をのべておこう。

まず、最も基本的なことは、上海孫中山故居蔵書の全てが孫文の思索に關係する資料とみてよいかどうか、どの書籍が孫文の思索と關係するのか、そして、妻である宋慶齡の蔵書の混入問題である。第一に、明快に指摘しうるのは、孫文の没後に刊行された書籍である。これは、宋慶齡の蔵書と言いうる。ただし、孫文の没後、かれの死を悼み敬愛の念をこめて孫文に贈られた書籍もある。他方で、宋慶齡故居の方に残された彼女の蔵書もある。両者の峻別には、關係者たちが頭をいためたことであろう。ただ孫中山故居の蔵書の全ての書誌資料に触れた印象では、宋慶齡の方針は実に明確である。つまり、孫文の没後に刊行された書籍はもとより、その生前に宋慶齡が自身で所有する書籍であっても、孫文の革命活動と關係し、それを記念するのは、孫中山故居蔵書として残していることである。すなわち、夫である孫文の没後に、「孫夫人」であるが故に敬贈されたものは、上海市政府の管理に委ねている。上海孫中山故居が国家重点文物に指定され、孫文の革命活動を記念する遺品を上海市政府の管理に委ねる段階で、管理番号である故居蔵書番号が付されたと思われる。解放後に、孫中山故居を記念館として残す方針が確定した一九五〇年代末に、孫文の没後の『三民主義』關係の出版物も、老革命家から初版、旧版の類の贈呈をうけている。このように、没後に故居に集められた書籍は、宋慶齡の一貫した方針により、彼女自身の蔵書とは区別されてきたことが随所にうかがえる。なぜ、宋慶齡が孫文の革命活動を記念するものとして孫中山故居蔵書を嚴重に管理し、没後の増加図書にも目配りを加えたのか。この問題の回答は比較的容易である。すなわち、孫文がその妻、宋慶齡に残した最大の遺産がこの蔵書であった。宋慶齡に与えた遺言状「家事遺囑」には、「余因尽瘁国事、不治家産、其所遺之書籍、衣物、住宅等一切均付吾妻宋慶齡以為紀念」と、それが明記されている。<sup>5</sup>それを遺産相続した宋慶齡は、それらを私産とみなさず孫文の革命活動を記念するものとして後世に残そうとした。そこに、没後の増加図書にも確固とした方針が貫かれた理由があったように思われる。また、生前の孫文との思い出を共有しうる書籍は、たとえ彼女自身の蔵書であつて

も、孫中山故居蔵書として残されている。宋慶齡は、別に宋慶齡蔵書を彼女の上海故居に残している。したがって、宋慶齡の孫中山故居蔵書の構成にかんする確固とした方針をふまえると、彼女の関係する二つの故居蔵書の相互関係が基本的に区別できるだろう。

第二に、孫文の生前において集められた蔵書をさらに細分し、孫文と宋慶齡の蔵書とを峻別しうるかどうかの問題である。これには、「孫文蔵書」という印文をもつ蔵書印があるもの、あるいは「Y. S. Sun」(初期のサイン)や「Sun Yat-sen」(晩年のサイン)とローマ字の署名があるものは、孫文の愛蔵書と容易に判定しうる。また、いくつかの印の種類があるが、宋慶齡の蔵書を意味する蔵書印や彼女の署名入りのものもある。しかし、これらの分別可能な署名や蔵書印のある書物は決して多くない。大多数が分別するための資料のないものである。孫文が愛読したというイギリスから刊行された海軍年鑑 [1/1.1/2-4.1/5.1/6-7.1/8-10.1/11.1/12.2/13-14.2/15] には、孫文の蔵書印も署名もない。ただ、この年鑑シリーズのなかの一冊に、孫文が軍艦の各国の保有量を毛筆で筆写し、整理した紙片が挿入されていた。個人蔵書としては、希有なほどこの海軍年鑑は年次を追って蒐書されている。にもかかわらず、この紙片や宋慶齡の証言がなければ、孫文の愛蔵書とは断定できない。この紙片と『孫文学説』校正刷を除き、孫文の自筆メモの類は故居蔵書から摘出できなかった。確かな伝聞資料に拠る王耿雄氏の記述に基づけば、孫文と宋慶齡の兩人とも蔵書に書き込みや頁の端を折るなどの習慣は全くなかったとのことである。この指摘は、原本を照合した筆者からみても同調できるものである。孫文の思索に関する資料を孫中山故居の蔵書のなかの孫文自身の書き込みから得ようとしても、それは上記の署名とメモ紙片一件を除き不可能である。難問は、孫文と宋慶齡の蔵書の区別である。しかし、もしも両者を厳密に峻別しようとする、問題がかえって錯綜する。秘書である宋慶齡は孫文のため英文圖書を代わって朗読、検索、読解する能力は充分にもっていた。両者の共同作業として孫文の晩年の知的作業を位

置づけるならば、宋慶齡の蔵書印があるからといっても、その書籍が孫文の思索に無関係とするのは不自然であろう。第三に、この調査で判明した最大の問題は、「佑尼干」つまりジャーニガン Jernigan, Thomas R (1857-1922) の蔵書を孫文が一九二二年に購入し、三カ月程度しか読む時間が無かったということ、さらに、非常に奇妙なことにジャーニガン蔵書に孫文の「批注」がすでに存在したという証言があることである。それは、李聯海の編者になる孫文のエピソードを集めた読み物のなかにある。「一九二二年の年末、上海のある新聞が一つの情報を載せた。それは、アメリカ籍の弁護士であるジャーニガンが上海で病没し、その蔵書がアメリカ領事館より競売にかけられる、というものであった。孫中山はその情報に眼を止めるとすぐ助手にアメリカ領事館へ行き蔵書目録を入手させ、見おえるやすくに助手に蔵書購入に行かせた。この図書が孫中山の住居に到着してから三カ月もしないうちに、孫中山は広州に赴かなくてはならなかった。助手はそれをとても残念に思った。ところが、かれが孫中山のためにその図書を整理すると、思いもかけないことに出くわした。それは、とても多くの書物にすでに孫中山の『批注』があったことである。かれは、『孫先生は本<sup>ま</sup>当<sup>ま</sup>に倦<sup>う</sup>まずたゆまずあらゆる書物を広く読んでいらっしやる』と深い感慨をこめて述べたという。」

原本照合に従事した筆者と補佐してくれた上海孫中山故居の職員を最も悩ませたのは、このジャーニガン蔵書の購入問題であった。上海孫中山故居の職員は、この混入をすでに知っており、その購入を孫文没後のこととみなし、上海孫中山故居の書籍を孫文の愛蔵書とする見方を否定する考えを筆者に何度も繰り返し述べてくれた。かれらは、あくまでも「孫中山故居の蔵書」であって、「孫文蔵書」ではないと注意を促してくれた。筆者のこの『上海孫中山故居蔵書目録』の「後記」の執筆にあたり最も苦心したのは、まさしくこのジャーニガン蔵書の購入問題である。筆者はジャーニガンの伝記資料と、過去にかれの蔵書であったことを物語るかれの署名に付された年次からみて、孫文の生前にジャーニガン蔵書が購入されたようである、という報告を上海の中山学社の席上でおこなった。上海の著名な孫

中山研究者である王耿雄氏の助言により、李聯海の編者の書物に上記の伝聞資料が存在することを知った。ここに「後記」に書き洩らしたことがらをさらに補筆しておく。さて、この伝聞史料にある孫中山の「批注」の問題である。もし、これが書籍の欄外や行間への書き込みとするならば、それは助手の完全な勘違いであると断定しうる。なぜなら、王耿雄氏も指摘するように、孫文と宋慶齡にはそのような書き込みや、頁の隅を折り込む習慣や、何らかの印をつける習慣は全くなかった。孫文の蔵書印のある孫文の愛蔵書を点検した筆者は、直接の調査結果を基に王氏の指摘の正しさを証言する。もし、その孫中山の「批注」が別の紙片に書かれた孫文自筆のメモ類ならば、その可能性は大いに残されている。けれども、そのようなメモ紙片は、海軍年鑑に挿入されていた一件の他には、筆者の調査では今日に残されていない。その助手が見た「批注」とは、元の所蔵者であるジャーニガンによるものだとすれば、それは助手が孫文の筆跡を知らないことになる。しかし、仮にも孫文の委託をうけ、ジャーニガン蔵書の購入と整理に従事した者なら、孫文の筆跡を判別できないはずはない、と考えるのが自然であろう。すると、助手の証言にある孫文の「批注」紙片とジャーニガンの筆跡の書き込みとの関係は、矛盾なく両立する。すなわち、孫文の「批注」は書籍に挿入された紙片であり、ジャーニガン筆跡の書籍への直接の書き込みとは容易に区分できる。ただし、助手の証言により深く注意すると、この孫文の紙片「批注」がジャーニガンのコレクションに多数あったがゆえの驚嘆がこめられている。まず控え目にて、三カ月間だけ孫文がジャーニガン・コレクションを熱心に読破したと考えたら、それですでに立派な孫文の愛蔵書の一部をなしていることとなる。けれども、そこから派生する問題として、孫文がジャーニガン・コレクションに触れたのは、余りに晩年のことで、かつ読む時間があまりに短いことから、孫文の思索、とりわけ思想的な営為の資料としては、丸善からの購入書とは意味が大きく異なる、という問題を念頭から消去できない。この問題は、孫文の生前において集められた蔵書を孫文と宋慶齡の蔵書とにさらに細分し、厳密に峻別する作業

よりも、孫文思想の形成過程の研究に孫文蔵書を資料として利用する際に深刻な難問を提起している。さらに、特に注意を要するのは、ジャーニガン・コレクシヨンの全てにジャーニガンがかれの自筆署名を記入していないことである。また、孫文も自己の愛蔵書の全てに自筆署名か蔵書印を遺こしてはいない。したがって、両者の間にも明確な一線が画せない。

以上のように、『上海孫中山故居蔵書目録』を孫文思想の形成と深化の過程の研究資料として利用する際に、いくつかの留意点があるといえる。例えば、孫文没後の書物は、孫文革命の追憶、記念などの意味が込められたものとして宋慶齡が孫中山蔵書に組み込んだものである。まず、それらは孫文思想の形成、発展、深化の研究資料とはならない。孫文生前の愛蔵書については、孫文が自筆署名か蔵書印を遺こした書籍は最重視すべきである。ちなみに、「後記」にも述べておいたように、孫文の蔵書印の全てとは言わないまでも、その蔵書印は孫文自身により蓋印されたことを証明するにたる資料がある。インクを使用して英文署名をしたのち、そのインクの滲みの拡がりを防ぐため上に乗ねた小さな紙片には、同時に押印されたと推定される蔵書印の朱泥が付着している。すくなくとも署名のある書籍に関しては、孫文自身が蔵書印の蓋印を行ったことを意味する。その意味で、重要な資料となる。さらに、最大の障壁はジャーニガンの署名がある書物の存在である。一般的にいつて、それらの書籍は、孫文の思索とは深く重ならないようである。その代表的な事例は、狩猟とその銃にかんする書物である。一書を除き、狩猟関係はジャーニガン・コレクシヨンの由来する。そこにはジャーニガンの所蔵を示す署名が残されている。しかも、孫文にその方面の関心があったとは考えられない。

ところが、上海孫中山故居蔵書のなかから、両者の交渉関係を示す二つの貴重な資料が出現した。その一つは孫文がジャーニガン・コレクシヨンの購入以前、ジャーニガンの著作を所蔵していたという証拠である。ジャーニガンは

『中国における狩獵』(Shooting in China) [92/1649] を著し、上海で一九〇八年に出版している。この書物のカバーの裏に、孫文は「孫文蔵書」の印を押している。孫文が旧宅の環竜路に住んでいた時期、ジャーニガンは、かつてアメリカの駐上海総領事を経験し、弁護士として上海ではすでに相当に著名な人物である。かれは法律家であるばかりか、中国の商務、特に銀行と通貨問題の専門家としてアメリカの学会誌に論文を掲載している。その知名度と関係の分野からみて、孫文が上海に在住している時、ジャーニガンと何らかの交際があった事実をこのジャーニガン著『中国における狩獵』という書物に押された孫文の蔵書印から汲み取りたいという思いにかられる。しかし、それはまだ傍証の域をでない。第二の資料として重視されるのは、Teigen, Add B 著の書籍である。Profitable Herb (Growing and Collection [90/829]) という薬草関係の書物には、丸善のシールが添付され、また孫文蔵書の印が押され、孫文の署名もあるから、それは明らかに孫文の所蔵本である。この書物の第四二と四三頁の間に、なんとジャーニガンの筆跡のメモの紙片が挿入されていたのである。筆者の現本照合の際の記録紙に、このジャーニガン筆跡のメモが孫文蔵書にあることをとても奇異に思い、欄外に特記しておいた。この薬草関係の書籍は、一九一六年の出版物である。すると、晩年のジャーニガンが孫文から該書を借覧していたこと意味する。もし、このメモがジャーニガンの挿入によるものであり、後世の別人の作為の挿入でないならば、孫文とジャーニガンの間には、相互に蔵書の貸借関係があったことになる。すると、孫文の命をうけ故ジャーニガンの蔵書を整理し、孫文の蔵書として組み込む作業に従事した助手の、「とても多くの書物にすでに孫中山の『批注』があった」という極めて奇妙な事実の証言にスポット・ライトを再度あててはならない。ジャーニガンには、書き込みの癖があった。しかし、孫文から借覧した書籍であるから、日常の習慣に従わず、珍しくメモの紙片を挿入したと考えられる。孫文は、もともと借覧した書籍で学問することに慣れている。したがって、書き込みの癖はまったくない。自己の所蔵本でも、紙片メモを挿入するの

が習慣である。すると、このように考えることもできる。ジャーニガンの蔵書を購入する前に、孫文はジャーニガンから借覧し、自筆紙片メモを入れたまま返却していたなら、助手のいう奇妙な事実、つまり、ジャーニガン蔵書を購入して間もない時すでに多くの書籍のなかに孫文の『批注』があったというのは充分にありうる事実の証言といえよう。もっとも、ジャーニガンと孫文とは、生前に深い交渉があったかどうかは、書籍に残されたサイン、蔵書印、メモの他には、今はそれを傍証する史料がない。けれども、孫文がジャーニガン蔵書にふれたのは、わずか三カ月のみではなく、一六年頃から借覧関係が続いていた、とみてよいのではあるまいか。ともあれ、ジャーニガン・コレクションの購入という行為とそれを妻への遺産として明示した行為そのものが、孫文の知的営為の方向を深く示唆する。そこで、本稿の主題にたちかえる。ジャーニガン・コレクションの購入をふくめ、蔵書構成をみると、青年期からの選書傾向には変化がなかったようである。つまり、かれが選んだ連ソ政策とコムニストとの交遊は、蔵書構成を一変させたものではなく、あくまでも対米志向の知的な営為を捨て去っていない。もっとも、こう述べた場合、ジャーニガン・コレクション購入のち広州に赴き、そこでの読書生活において、ロシアやコミニズムに坎する理解を深めるような知的営為があったことを捨象できないとする見方もありうるだろう。とはいえ、孫文はその読書生活を見るかぎりには、ジャーニガン・コレクション購入に象徴される、かれの内面にあるアメリカ志向には変化がなかったようである。ここに、一つの興味深い史料がある。イースト East, Edward Murray 著の *Mankind at the Crossroads*.

[71/1550] とくう書物のカバの裏に、「Sun Yat-sen, April 12, 1924. Canton」とくう署名が記されている。詳しくのべるまでもなく、孫文がこの書物を広州で入手していることがわかる。広州に大本営を構え、北伐戦争の準備と北方の軍閥諸勢力と政治交渉に専念していた時期のことである。この四月一二日は『孫中山年譜長編』によると、外交部の正副部長である伍朝枢、郭泰祺とともに宋慶齡が上海より広州へ戻っている。<sup>9</sup> ちょうどこの年、一月二七日よ

り三民主義の講義を開始する。民族主義、民権主義の部を四月二十六日に終える。その後、三カ月の準備期間をおき、八月三日から民生主義を講ずる。その後の民生主義の第五講以下は最後の北上にともない未完となる。この書物の著者イーストは農業学者、とりわけ食料問題の専門家である。多くの専門書を残し、この『岐路にたつ人類』でも訳すべきこの書物は、目次から判断すると、人口と食料生産の関係を農業技術と経済史の観点を結合して述べたものである。つまり、孫文の民生史観の根本問題に係わる課題と直接につながる専門書である。この書物を入手したいと考えた孫文の意識のなかには、民生主義の講演の準備が底流にあったと考えてよいだろう。

ところで、この書物が上海の故居蔵書に収蔵されていることから推し量ると、広州に大本営を構えていた一九三二、二四年の時期の思索の素材となった書籍は、その全てではないとしても、広州に放置されたのではなく、最後の北上の機会に携えたか、あるいは、孫文の没後に上海故居へ遺産の一部として移管された、とみるのが自然であろう。その他、Allport, Floyd Henry の一九二四年初版の社会心理学の書物 *Social Psychology* [65/1469] に、*「Sun Yat-sen」* とペンで記名がある。この書籍も、上記の書籍と同様、この推定を補強するものである。この書籍は、同年秋までに広州で入手されたものと考えるべきであろう。とするならば、『三民主義』序文で孫文が自ら述べるところでは陳炯明の乱で失われた数百冊の英文図書以外は、一九二二年くらいからの孫文の思索に資料として供された書物は、そのほとんどが上海の故居に収蔵されているとみてよいのではないだろうか。とりわけ、孫文は一九二四年の二月より病床に伏しているから、かれの知識欲の軌跡をあらわす一つの指標である読書の最後の年度、つまり一九二四年に眼を通したことを立証できる書籍が上海故居に保管されている事実を後世のものは軽くみることはできない。上海故居蔵書の内容から判断する限りでは、そこにはマルクス主義、レーニン主義への思索面での急速な傾倒を物語る書物はない。ただにかれ自身の主義をかれ自身が深く信奉し、その未完を完成に近づけるあくなき研鑽をつんでい

た姿しか浮かびあがってこないものである。

## 二 孫文とアメリカ文明

孫文にとつてのアメリカは、兄の庇護のもと一八七九年に十三才でハワイへ渡航、イオラニ・スクールに学んで以来、まずは学びの対象であつた。祖国では通常の科挙の受験者がたどる幼児期から児童、少年期に受けるべき訓練をほとんど受けていない。私塾や郷塾で学んではいるが、科挙受験に即応したものではなかつたようである。科挙受験の第一関門である童試をうけるべき年齢期にハワイのイオラニ・スクールで、さらにオアフ・カレッジで本格的な欧米式教育をうけはじめた。英語をよみ、英語で思考することが求められた。このような学びの習慣は、孫文の精神生活のちのちまで強く規定したにちがいない。孫文の経済思想を検討した出口勇蔵氏は、「孫文本来のアメリカ礼讃」と評する。孫文の経済観はアメリカ文明への親近感に満ちていることを特筆する。一般に想像されるのは、かれが熱心に連ソ容共政策を推進したから、孫文は晩年にマルクス主義への理解を深めたと思われがちである。特に、ウイリアム・William Maurice は、そのような見方をその著作 *Sun Yat-sen Versus Communism* [24/1314] のなかで述べる。けれども、出口勇蔵氏の見解は逆である。その分析によると、「孫文は、ウイリアムが主張するように一九二四年の四月までマルクスの信奉者であつたのではなかつたし、また八月以後から社会史観の全面的な支持者となり、ウイリアムのようなマルクス主義の批判者としても登場したのではなかつた」と。これに続け、「機会主義者流に」ウイリアムの理論を「援用」したにすぎないと、出口氏は主張する。孫文は中体西用論者として一貫していたという、経済学説史家・出口勇蔵の評価である。民族主義（中学を体とする）に西欧の学術を応用として摂受するものと、出

口氏は孫文思想の枠組みをあらかじめ固定的に措定するから、その枠組みのなかでしか変化の面が浮かんでこない。その枠組みの限界はさておき、いずれにせよ晩年の孫文とウイリアムとの間に、強い共鳴現象が生じたことも事実である。そこで、論をさらにおしすため、孫文の経済思想とアメリカの経済学界との関係をみておく。

旧来の孫文の経済思想の研究では、ヘンリー・ジョージの単税説への孫文の傾倒のみが注目されてきた。たしかに、上海の孫中山故居の蔵書にも、ヘンリー・ジョージ関係の資料 [51/312, 52/315, 70/1545, 124/1854-56] が保管されている。しかし、孫文が経済について言及する時にふまえている学説や学理は、ヘンリー・ジョージに限らず、アメリカの経済学界の動向に広く依拠した傾向をもつ。筆者は、この上海孫中山故居の蔵書の経済学の書目を分析し、それをアメリカの制度学派の生成、展開、確立過程と「共鳴」現象をもつものと解釈し、中文で一文を草し中国で発表している<sup>1)</sup>。ここでは再びの論及を避け、概略を記すにとどめる。

一九世紀後半から独自のな傾向をもち始めたアメリカ経済学は、奇人ヴェブレムの活躍ののち、コモンスの学説整理をへて一九二六年に「制度学派」と命名され、一個の独立したエコノミックスの体系として確立する。「制度学派」なる呼称は、孫文の生前にはない。孫文の死後ほどなく成立する。その特色は、教育などの社会制度が人倫の進化に寄与することを肯定的に見出し、それら経済外的な制度要因を組み込んだマクロ的な人類経済哲学を根幹とする経済学体系である。ミクロ的には、クレジット（国債も信用通貨も広く含む）や鉄道などのフロー面（交通、流通、金融）が有効需要を先行的に喚起する面を重視するなど国民経済システムを提唱する経済学派と認知される。しかし、孫文の思索はアメリカの「制度学派」の影響下に生まれてきたのではない。むしろ、かれの *The International Development of China* の基底にある経済学次元での思考をみると、青年期から親しんできたアメリカ経済学の風土とともに、その思索の道を広く歩んだものと解されよう。アメリカは孫文にとりまず学びの対象であり、のちに語り

かけの対象となる。アメリカは、さらに孫文にとつての知の舞台ともなる。

その一つの例が、一九一七年にアメリカで出版されたラトゥレット Latourette, Kenneth Scott の『中国の発展』*The Development of China* [11/1119] という書籍と孫文の英文著作の執筆の対応関係にある。この書物は、当時、中国では大いに話題となったようである。いうまでもなく、孫文の『*The International Development of China*』と題名が酷似している。*Development* の前に *International* が附されただけである。ラトゥレットの書物を踏まえての著述であり、書名であることが判明する。なお、このラトゥレットの書物には妻の宋慶齡への孫文自筆の贈呈の辞がある。筆者の調査のかぎりでは、孫文が妻に献辞を書き贈与した唯一の書籍である。

孫文の経済思想を具現化し、その経済思想と経済学説を第一次大戦後の世界経済の状況にそくした政策論が、英文タイプで書き下ろされた。後に『*The International Development of China*』と題されるこの文章が、一九一九年二月一日にアメリカ駐華公使ポール・S・ラインシュ Paul S. Reinschのもとに届けられる。執筆は、同年一月と推定される。『*国父全集*』所収の『*建国方略*』の実業計画の部に附載するラインシュ公使の孫文あての返信書簡によると、「手紙は二月一日に受取りました。同封の手書、国際共同発展中国実業計画を拝読し、深く感銘をうけました」(三月一七日)とある。その手紙は、「先生の発展実業計画に関し、将来さらに詳細なるものがあると喜ばしい」と結ばれている。英文の原文では、*I should be glad to hear from you further and more in detail concerning development plans.* とある。ここからみて、詳細な各論を附し、著書として纏めるように勧めたのは、むしろラインシュの側であることが判る。その文書形態は、英文タイプ六頁半の要綱というからハンドアウトの体裁のままであつたようである<sup>(13)</sup>。

この文書は上海駐在のアメリカ総領事を通じ、北京の公使館へ送付されたものという。すると、この文献はまずは

一般に公刊するための著作ではなく、孫文の対アメリカ外交活動のための文書であったことがわかる。また、イギリスに対しても、旧知の恩師カントリーの夫人への三月二〇日付けで書簡（『国父全集』第三冊、第六〇八頁）により、すでに政府閣僚へ郵送されていたことがわかる。しかし、このイギリス政府への外交工作は見るべき結果を生んでいない。その後、諸外国にも送付しているけれども、特筆するにたる反応はなかった。のちの刊本である G. P. Putnam's Sons 版に附載されたイタリーの陸軍大臣のカビグリア将軍の返信によると、この文書を題名ではなく、内容の要約、the interesting project regarding how to employ through an International Organization the exuberant industrial activities created by the war, in order to exploit the great hidden riches of China と表現している。この論旨要約のおかげで、孫文の送付した文書は、後世に「緒言」という標題が付され、「第一計画」の前に配列される序説の部分の原稿であることが判明する。また、The International Development of China という書名はまだつけられていなかったことがわかる。

アメリカ側では相当に好意的に受け止められたようである。孫文は三月一七日付けでアメリカ合衆国政府の商務長官であるウイリアム・コックス・レッドフィールド William Cox Redfield へ同書を發送、五月一二日付けで正式回答を受け取っている。それは、計画の基本に賛意を表し、それを遂行するのに必要な資金量の膨大さとその償還方法に意見を附したものであった。<sup>15</sup> 決して砂上の楼閣と冷笑されたわけではない。アメリカ世論も、好意的であった。『インディペンデント The Independent』誌は、Plain Speaking from China と題するコラム欄で中国経済開発の計画と外資導入を目指す孫文の意図を紹介する。<sup>16</sup> 中国在住の欧米人と中国専門家たちに読者をもつ『ファー・イースタン・レビュー Far Eastern Review (遠東評論)』誌（六月刊）は、The International Development of China の冒頭の「第一計画」の部を英文原稿により掲載する。それを見た北京政府の交通部の鉄道専門の外国人顧問であるジョ

ン・アール・ベーカー John Earl Baker は、孫文宛に書簡（六月一七日付）を寄せる<sup>16</sup>。それは、孫文の計画が鉄道経済の理論と合致すると証言する。ちなみに、中国語訳による国内への紹介は、英文原稿の書き下ろしの進展とともになされる。この年、八月一日に発刊された『建設』雑誌は、創刊号より順次に分載し、三巻一号まで連載するが、完全掲載ではなく「第四計画」第三節までの中文訳である。『建設』雑誌の創刊号の掲載開始にあたっての記者の注には、「前置きの総論はすでに内外の各新聞雑誌にみられる。その第一計画以下はすなわち本月刊がはじめて原著を漢訳するものである」と述べる。ここでは「総論」と述べているが、先に「緒言」と記した序説部分を加え、「第一計画」の部以下の英文原稿がすでに完成にむかっていたことが判る。『建設』雑誌は、この序説の部分の末尾にレックドフィールド書簡の中文訳を附載する。「第一計画」の部には、それに対するコメントとして前述のベーカー書簡の中文訳を附載する。さらに『建設』雑誌の第一巻二号より「第二計画」の連載を始める。その第二節の前半部分の後ろに、ラインシュの第二書簡（八月二五日、北京発信）の中文訳を附載する。そこで、この論文の「次編」の受領を告げ、上海を国際港である東方大港として発展させようとする案に始まる「第二計画」にも、最大の讃辞を寄せている。このようにラインシュなどの欧米人との対話をとめないながら、The International Development of China と題されるこの文章がしだいに著作物としての形を整えてくるのである。

このような状況にあり、孫文の人物と思想をより広く欧米社会へ紹介するため、ポール・ラインバガー Lindeberger Paul は、一九一九年七月より長時間のインタビューを孫文にたいしておこなう。ラインバガーは、アメリカ人でフィリピンでの法律関係の公務についていた際、船中で孫文を信奉する中国人コックの手柄に感銘、かれの紹介で中華革命党の支持者となる。公務を解職された後、一九一七年に中華革命党の党務に従事するため上海に渡航し、その法律顧問として長期居住していた。その年八月、ラインバガーは孫文の計画するアメリカ資本家たちの対中国

投資を誘引するため、アメリカでの講演旅行を勧める<sup>17</sup>。けれども、孫文の国内政治の日程は、その勧誘を固辞させつづける。当時、北京政府に対抗し、広州で中華民国軍政府（いわゆる広東軍政府）を樹立する計画が進められていたからである。

孫文が最も期待し、かつ警戒していたのは、アメリカであった。第一次大戦後の世界経済の舞台において、随一の経済力を持ち海外へ資本投資を行いうるだけの余剰資金をもつのはアメリカであった。しかも、アメリカの政財界の世界に向けたグローバルな視線は、アジア・太平洋地域とりわけ中国へ向けられていた。中国の国内にも、五四運動時期にアメリカへの好感が広い裾野をもって広がっていた。もし、このアメリカが第一次大戦終結の後、軍閥政権である北京政府を唯一の合法政権と定め、巨額の政府借款を供与するならば、孫文の理想とする三民主義による革命実現の時期は相当に先送りされてしまう。しかも、孫文が具体的に注視せざるをえなかった焦眉の課題が、二つあった。一つは、アメリカが主導する英、仏、日の四カ国の借款団が北京政府にどのような大型借款を供与するか否かの問題である。二つめは、アメリカ主導の戦後体制の幕開けであるワシントン会議において、中国代表として誰が何を代表して出席するかをめぐる中国代表権問題である。このような状況のもと、孫文の『The International Development of China』と題する英文文書は、国際世論、とりわけアメリカの世論が軍閥政権である北京政府を唯一の合法政権とするのに躊躇せざるえない状況を生む、知的、道義的な面での一種の「道義の国際環境」というべきものの形成に多大な寄与をなすことが期待されていた。つまり、「武力の国際環境」においては孫文らはさしたる影響力を行使するにたる存在ではない。アメリカ外交は常にパワー・ポリテックスを基本とする方向へ回帰するとしても、アメリカ主導の世界体制の幕開けであるワシントン会議をとりまく外交舞台では、公正な道義が充分に説得力をもつ国際環境が同時に存在した。孫文が『実業計画』を中文ではなく、英文でまず公表した意図は、中国大陸において南方権力を樹

立し、北京政府が半分の権力しかもたない疑似的な「中央」政府であるという実体を国際社会にむけ顕在化させる政治闘争の一つの先駆的な形態であると言えなくもないだろう。もともと、『実業計画』は外交の手段であるまえに、孫文の「格物致知」による国民革命プラン作成そのものでもある。

一九二〇年四月五日、アメリカの銀行団を代表するモーガン財団のトーマス・W・レマント Thomas W. Lamant を孫文は寓居に招き、鉄道敷設計画を示し、投資活動を要請したと伝えられる。<sup>(18)</sup>この話は、『実業計画』の実現がこれの革命の目的そのものであることを意味するひとつの例証であろう。また、同年八月五日、上海をおとずれたアメリカの国会議員団の歓迎会における「中国問題の解決」と題したスピーチで、日本政府が二十一カ条と軍事協定を媒介に華北の軍閥勢力との政治・経済的な深い密約関係にあり、そのことが中国の統一を妨げていると、日本の政策を厳しく非難し、アメリカが日本と同調しないよう、孫文は強く呼びかける。<sup>(19)</sup>

一九二〇年一月二十九日、上海より広州へ赴いた孫文は、今の越秀公園のなかにある小高い丘、観音山に軍政府を樹立する。けれども、その実体といえば支配区域の狭い、地方政府に近いものであった。しかし、その当時に発足した四カ国借款団は、孫文の当初の目論見が全くはずれたとはいえなかった。確かに、その代表部は北京に置かれ、外交的には北京政府を交渉窓口とするものであった。けれども、中国国内での外資の受け皿となる中国側の銀行団は、北京ではなく上海に成立した。そのため、北京政府への不透明な政治資金供与のための大型借款供与へと展開する懸念は大幅に解消された。むしろ、孫文の提唱した線に則し、その資金は「専ら実業建設の方面に用いる」と定められた。言うまでもなく、上海で成立した国内銀行団では、当時、親孫文勢力の虞洽卿らニンボー幫が強い影響力をもっていた。外交面では北京政府の面子が立っただけでも、実利においては孫文派にも影響力を及ぼす筋道が残されたと思われるべきであろう。<sup>(20)</sup>

一九二二年五月五日、孫文は広州で中華民国非常大總統に就任する。そして、その日にアメリカ大統領のハーディングに対し、広東軍政府の承認を求め、かつアメリカ政府が過去に広東軍政府とアメリカ資本家との間の合弁事業の認可を否決した決定を再考するよう求める手紙を発する。それをうけ、アメリカの駐広州領事は六月二八日午後、孫文と「正式の外交接見」(『国父年譜増訂本』下冊)を行う。孫文は、ワシントン会議の提唱者であるハーディング大統領にむけ、「北京政府は非法であり、対外的に中華民国を代表する権利がない」と主張し、「広州の中華民国政府の代表を会議へ参加させるべき」と要求している。多くの曲折をへた結果、北京政府を唯一とする枠組みが綻び、中国の代表団に広東軍政府を代表する外交部次長、伍朝枢が加えられた。もともと、実際には伍朝枢が会議へ赴くことはなかった。このように、外国資本の中国への建設投資を呼びかける孫文の英文論文は、上梓される前に対アメリカ外交手段として多面的に活用されていたのである。なお、孫文はあわせて著作として中文『実業計画』の完成にも努力を傾ける。それとともに、イギリスにおいて英文の公刊物として出版するようカントリー夫人を介し依頼する<sup>(2)</sup>。その結果、G・P・パトナム・アンド・サンズという比較的著名な出版社から、一九二二年に原題のまま刊行される。旧モリエール路の故居には、その刊本が十部も保管されている[5/1012-21]。G・P・パトナム版が上梓されたおかげで、孫文の若き日の学びの場であったロンドンの大英博物館にかれの代表作である自著が永く收藏されることになる。孫文の学びを基礎とした外交努力はまだ続く。

孫文の対アメリカ外交における当面の課題は、中国の関税収入の運用益と借款の返済の通減から生ずる余剰金とを北京政府が独占していた問題を「閑余問題」として提起し、その一部を広東政府へ分配させるための交渉であった。簡単にその最終交渉をみておく。一九二四年一月四日、在華アメリカ公使のシュルマン Schurman, Jacob Gould は香港を経由し、広州に到着、五日に外交部長の伍朝枢と会談し、孫文と会見する。六日の午後、孫文はシュルマンと

の再会見に臨む。当初は決してなごやかな空気ではなかったようである。その事情を当時、駐広州の総領事であった天羽英二の回顧談と日記をもとに見ておく。<sup>(23)</sup>

「廣東軍政府と英仏租界との衝突から沙面の外国人に雇われて居た中国人が『ストライキ』を起し、廣東政府と沙面との間に色々な問題が起ったのであります。この事件に付いては日本側は謂はば中立の立場にありましたし、私が主席領事であった関係から私が仲裁に立ちましたので、それやこれやで孫先生とは屢々面会する機会がありました。」と述べている。そして、日記の方にも「一月四日（金）午後二時曲同豊、午後三時、井上謙吉。午後四時半乃至六時半、米国公使。終日多忙。領事団事務ノ為ニ多忙。曲同豊時局談、井上同上。米国公使來粵。四時半ヨリ米、仏、葡、伊、日各領事參集。時局談、閑余ノ件」とある。六日にも、米国公使を囲み領事団會議。そして、七日、井上謙吉より「孫文ハ『米国公使調停ス』ト云フ」との確証を得ている。すなわち、在華アメリカ公使の提案である粵閩の閑余に関して、その一部を廣東政府に分配するという妥協案が提示されていた。それで、天羽は井上を使い、孫文側が妥協に応ずるか否かを事前に内々に腹を探らせている。その井上情報のごとく事態は推移する。沙面事件にともなう英米の白鷺潭への威嚇的な軍艦配備によりもたらされた緊張はしだいに緩和される。そのうえで、天羽は主席領事の責務として、広東省への輸入関税をあつかう粵閩の税関長としばしば連絡し、妥協案の実施を確実ならしめる。孫文の側では、すでに五日の在華アメリカ公使との会談で提示された閑余の使用先を「広東の河川の浚渫工事」と具体的に提示し、即日に「広東治河督弁」には海軍指揮官である湯廷光を解職、文官を任命し、その事業が軍事目的だとする疑惑の解消に努める。<sup>(24)</sup>

この時まさしく広州では歴史的に極めて有名な、国民党の第一次全国代表大会の開催の準備が整えられていた。ソビエト・ロシアとの提携と、中国共産党員の国民党への個人加盟案の提出がすでに予定されていた。この当時、列強

の外交は、とりわけ日本政府は孫文が親ソビエト・ロシア政策に傾斜するにつれ、孫文政権との距離を拡大させる傾向を有していた。けれども、列強の孫文政権への譲歩が得られにくい状況のなかで、アメリカ外交は列強と広東政権との緊張緩和に動き始めた。しかも、天羽も日本国内での孫文政権への冷遇にも関わらず主席領事の責務を介し、この緊張緩和を促進した。これを孫文の個人的な資質と、アメリカの関係者にたいする積年の信頼関係を高める努力の結果として評することも許されよう。

孫文はさらにアメリカのシベリア出兵からの撤退にともない、アメリカの対ソ政策に変化が生じていたことを知っていた。したがって、その点をふまえれば、日本の対ソビエト・ロシア政策の転換も、近い将来に当然に起こりうるものであり、結果として連ソを掲げる広東政権への日本政府の冷淡な対応も変化するものと希望的な観測をもっていたようである。北方の軍閥勢力の動向に直接の影響力を行使しているのは、日本である。日本のシベリア出兵は、対ソ戦略のみならず、中国国内への北方軍閥勢力の操縦を根幹とするものであった。孫文にとり、「関余問題」における在華アメリカ外交団の働きは、こうしたアメリカの対ソ政策の変化にもとづくものと受け止められた。日本の天羽総領事は、日本国内での孫文政権への冷遇にも関わらず、アメリカ外交との協調関係を保つ線で動いた。そこで、孫文には北方の軍閥との勢力関係を変化させる二つの道があった。一つは、北伐戦争の勝利、ただし成算はほとんどなかった。もう一つは、外交手段による国際環境の変化、とりわけ対日外交である。一九二四年という孫文の死去の前年の選択は、この両面のいずれにおいても不成功とするのが一般の評価である。しかしながら、孫文の死去のち広東政府は瓦解しないばかりか、むしろ北伐戦争の勝利へと上昇局面へ移る。その意味で、一九二四年という年をふりかえると、孫文が北伐戦争と平行し、対日外交に全力を尽くしたのは、アメリカ政府と広東政権との関係改善を背景に置いてこそ理解できる。

他方、アメリカでも孫文に対する理解に変化がうまれていた。この節のはじめに、出口勇蔵の手をかりウイリアムを紹介した。ウイリアムは、孫文がこの年の四月まではマルクスの信奉者で、八月以降に批判者へ転向した、と主張している。四月まではマルクスの信奉者というのは、言葉が不正確である。けれども、ソビエト・ロシアへの親近は、外交上に限ると、かなり強いものがあつた。しかし、結論を急ぐが、孫文はソビエト・ロシアのマルクス主義宣伝物に接していたにもかかわらず、宋慶齡が後年に入手した書籍以外に上海の故居蔵書にそれらは残されていない。孫文とウイリアムとの間に深い知的な親交が生まれ、ウイリアムはやがてアメリカの地にあつて中国国民党に入党する。両者の共鳴を支えたのは、アメリカ経済学の知的土壌である。ウイリアムは一九二〇年七月に私家版『社会史観』*The Social Interpretation of History* を印刷してゐる。Sotery Publishing Co. から刊本で出されるのは、その翌年の八月である<sup>23</sup>。この書物に孫文がいつごろ接したのだろうか。一般に知られるのは、一九二四年六月に、孫文が三民主義の講演を再開し、その民主主義の部分でウイリアムのこの書物を紹介、引用してからである。ところで、すでに述べたように孫文は一九一九年に「三民主義」という小論文を脱稿している。むろん、未公開のものである。この小論文を骨子として、一九二四年の『三民主義』講演が生まれてくる。小論文「三民主義」を脱稿した時点では、孫文は未だウイリアムのこの書物は知るよしもない。したがって、孫文の言うように両者の近似性は完全に「符合」であると信じてよい。一九二四年の八月にいたり、この「符合」を積極的に対外宣伝し、ウイリアムらに「マルクス主義からの転向」を強く対外的に印象づけたのは、孫文の自身の主義のゆく手と、国際政治の力学の赴くところの双方の方向軸を重ねたものとみられる。ここで言えることは、この年、レーニンが死去し、ドイツでの革命の可能性も全くなくなり、ロシア革命が世界の構造変容に及ぼす影響力の上限が多くの知識人に容易に見通せるようになったことである。しかも、アメリカが「石井・ランシング協定」による日米協調の対中外交の線をはなれ、シベリア出兵から

も撤退し、日米の間の対中軍事、外交の協調関係に亀裂が生じてきたこと、および、シベリア出兵において日本が孤立し、成果なき単独撤退をよぎなくされ、日本の大陸政策が客観的に転換期に直面していることがみとれる。このように、二四年には二〇年代当初に期待あるいは希望的に想定されたとは異なる国際政治の構図が生まれていた。

国際政治の変化とは別に、孫文は主義としての共産主義の展開に限界をすでに認識していた。陳炯明の反乱に遭遇し、広州から逃れる際、「今日のロシアの新経済政策にいたっては、もはや共産主義を変更し、国家資本主義を採用し、私有財産の禁止を緩和している」と蒋介石に語った<sup>(26)</sup>という。その認識の延長において、ウイリアムの学説と自説との符合が宣伝される。孫文自身にとり民生主義を学理として完成させる途上での、強い意欲の表示でもある。そのことは、この年、神戸で「大アジア問題」講演のかたわら、購入した四種の英文図書の標題からもくみとれる。いずれも、神戸でこの一月に購入したことが、自筆サインで記録されている。それらの著者と標題を掲げながら、孫文の最後の購書の意図のありようを推察することにした。Stoddard, Theodore Lothrop の Racial Realities in Europe [12/1136] は、「大アジア問題」講演の内容と連関すると思われる。Jensen, Jens Peter の Problems of Public Finance [55/1214] と Barnes, Harry の Housing: the fact and the future [68/1519] Hedrick, Wilbur Olin の The Economics of a Food Supply [51/299] の三点は、いずれも民生主義を深めるための、公共財政、住宅、食料問題の思索の材料であることが容易に確認できる。連ソ政策の裏面で、このようにかれは英文図書の検索を通じ、自らの主義に深く醒めた思索を続けていたといえよう。

われわれの目を引くのは、最晩年の孫文が、公共財政、住宅問題、食料供給、この三分野につき、経済学の位相で考察していたことである。そこでは、政治力学を覇権をもとめる霸道とみなし、経済力を王道とし、経済学の学理の探索による民衆の生存問題の解決を希求した、かの『三民主義』講演を改めて想起させられる。<sup>26</sup>このような衣、食、住、行に示される民衆の生存問題の解決こそ、まずは『実業計画』にみられる孫文経済学の根本命題である。民衆の生存問題の解決、それは交響曲における主旋律のように『実業計画』から『三民主義』講演へと貫かれる。このような孫文の思索の傾向を知れば知るほどに、かれの内にある一九二〇年代は、米ソ二極対立の時代の終焉のあと、すなわち現代と状況の類似が生まれてくるのではないだろうか。

孫文の王道文明論の特性を知るには、アメリカの知的な風土と物質文明の進展を知らなくてはならない。かれは、それを無意識に踏まえる。出口勇蔵氏は、孫文思想を反欧米の「亜細亜主義」とする日本軍国主義の孫文思想理解とその宣伝を批判した。それは、卓見である。一九四〇年代の初めの批判である。その後、米ソの二極対立の構図が生まれ、出口氏の卓見も多くの評者の目にとまることはなかった。とりわけ、中国大陸では連ソの孫文像が固定的な見方として定着する。筆者が出口氏の見解を不備とするのは、孫文が中学を体としアメリカ知識を「機會主義」的に援用したとする点にある。もとより、出口勇蔵氏の経済学説史の書物には、制度学派には筆がほとんど割かれていない。この機会に深く考えさせられたことがある。中国語と英語、二つの言語の発表手段をもつ思想家を、中国語の著述がいかに多く、重要であろうとも、英語による思索や発表を捨象すると、それは明らかな片手落ちとなる。その意味で、『上海孫中山故居蔵書目録』の編集作業のため上海、香港で費やした一年のあいだ、筆者自身の味わった苦しみを告白しておかねばなるまい。孫文が架けておいてくれた日本の知識人界とアメリカのそれとの間の橋を遅ればせながらも渡るほかはないと、不明を恥じる日々であった。ジャーニガン・コレクションを遺産として残した孫文の意図

こそ、かれの内に凝縮された一九二〇年代という時代の可能性への確実な証言に思われてならない。『上海孫中山故居蔵書目録』のなかにあるジャーニガン・コレクションをも含め、その大部分が孫文の思索素材であるという見方に立つなら、その思索に先駆的に表現されていたアメリカと中国の共生という太平洋時代への予感を感じることができ。それは、またこう暗示しているかもしれない。「知」を通じた王道への終わりなき学びの路に、孫文が今日も立ち続けていることを。

## 注

- (1) 上海孫中山故居管理処編『上海孫中山故居蔵書目録』（内部発行）一九八九年。この目録に基づき孫文思想の研究を孫文自身の蔵書から解明するという新たな方法を開拓されたのは、上海復旦大学の姜義華教授である。その論文は、中国文の原文は未公開。邦訳「孫中山の民族主義と中国の近代民族形成過程」（内藤明子訳）が日本孫文研究会編『孫文とアジア』一九九〇年八月国際学術討論会報告集』汲古書院、一九九三年に収載されている。この開拓の意義は大きい。筆者の原本対照により、ジャーニガン・コレクションを孫文の思想形成の資料として扱うには一定の留保と検証が必要である。例えば、Ku, Hung-ming『The Discourses and Sayings of Confucius』(28/1373) には、ジャーニガンの蔵書を示すかれの署名が残されている。姜義華教授は、孫文が自己の中文による経学の力量不足をカバーするため、この書物により儒教知識を補充したと論じているが、このような論議にジャーニガン署名の書籍を論証に使うべきではないだろう。また、Holst, Hermann Edvard von 編『アメリカ憲政史』(99/432-439) や、Hallam, Henry 英国立憲史 [100/502] にジャーニガンの署名がある。ことに留意しておきたい。

- (2) 上海孫中山故居管理処・日本孫文研究会合編『上海孫中山故居蔵書目録』日本汲古書院、一九九三年。筆者はこの目録の後記（中文）において、ジャーニガン・コレクションの問題に考証を加え、孫文の生前の蔵書とすることに誤りなきことを論証している。本稿では、その考証の邦訳にとどまらず補足資料を追加する。

- (3) 党史会編『国父全集』第二冊、一五四―一六四頁（一九八一年版、全六冊を使用、以下も同じ）。並びに、羅剛著、蔣永敬校訂『中華民國国父実録』第五冊、正中書局、一九八八年、五二四―五五頁を参照した。
- (4) 姜義華「孫中山思想発展学理上的重要準備——跋新發現的一份孫中山購書清單」（未公刊）『孫中山与近代中国學術討論会』（一九九二年一月一〇―一四日、広州、中山大学近代中国研究中心）。
- (5) 『孫中山全集』第一卷、中華書局、一九八六年、六四〇頁。
- (6) 王耿雄『孫中山与上海』上海人民出版社、一九九一年、一二一頁。同頁に、宋慶齡による孫文の読書生活の回顧が紹介されており、海軍年鑑を愛読していたという証言がある。
- (7) 李聯海『孫中山軼事』広東人民出版社、一九八五年、二五一頁。
- (8) 中国社会科学院近代史研究所編『近代來華外国人名辞典』中国社会科学出版社、一九八一年、二四〇―四一頁。
- (9) 陳錫祺主編『孫中山年譜長編』下冊、中華書局、一九九〇年、一八八二―八三頁。
- (10) 出口勇藏「孫文の経済思想」高桐書店、一九四六年、八〇頁。
- (11) 拙稿「試論孫中山与美国経済学」（中文）『中山大學學報論叢・孫中山研究論文集第九集、一九九二年五月。
- (12) 拙稿「孫文経済学説試論」孫文研究会編『孫中山研究日中學術討論会報告集』法律文化社、一九八六年。中国語訳『近代中国』第二輯、上海社会科学出版社、一九九一年。
- (13) 党史会編『国父全集』第一冊、六六〇頁。『中華民國史事紀要』民国八年二月一日の項。羅剛著、蔣永敬校訂前掲書、第五冊、三三三―三三五頁。
- (14) 党史会編『国父全集』第一冊、六六一―六三頁。
- (15) 党史会編『国父全集』補編、英文著述、一頁。
- (16) 党史会編『国父全集』第二冊、六六四頁。序説の部分に関しては、中華書局版『孫中山全集』第六卷に、「この編首は、一九一八年に単独で発表され、もともと英文であった、題名を中訳すると『国際共同發展中国実業計画書——補助世界戦后整頓実業之方法』となる」との脚注がある。これは注目すべき指摘である。「一九一八年に単独で発表」を裏付ける史料は確認

できないが、Far Eastern Review の一九一九年六月号に掲載されたのは、この英文のハンドアウトであったことは前後の史料と照らし確實だと思われる。遅くとも一九一九年一月末までにハンドアウトが完成していた。しかしながら、題名のある冊子ではなかったようである。ところが、同年六月一九日付けで、「補助戦後整頓実業案」と「国際共同発展中国計画」と題した文書をローマ在住のアメリカの都市計画の専門家「安得生 Anderson」が受領したとの返信書簡が伝わっている（元は『建設』第一巻五号に引用、のち『国父全集』第一冊、六六四―六六頁）。それには「附図」があったという。すると、一九一九年一月末までに書かれたタイプ六頁あまりのハンドアウトとは体裁を異にする別の冊子が新たに作成されていたようである。しかも、「附図」があったとなると、序説部分だけでなく、「第一計画」を含むものであったことは確実である。すると、この「附図」つきの冊子と、ラインシユが北京発、八月一日付けの返信書簡により受領を伝えた「発展実業計画次編」と同一のものかどうかの問題である。ラインシユの八月書簡は、その「次編」に言及し商港開発を論じているから、「次編」は「第二計画」を含む冊子であろう。すなわち、六月一九日にローマへ到着した冊子と、八月に北京へ到着した冊子とは、孫文の原稿執筆の進展に応ずる追補があったとみてよい。したがって、『建設』雑誌での中文訳の紹介が、「第四計画」の第三節までで中断した事情も、孫文の原稿執筆の進展と対応していたことを考えると理解しやすい。そして、英文の原稿は翌年の七月二〇日（英文版の序文執筆日）までには完成し、上海の商務印書館より英文函書として刊行される。そして、中文の完訳本は、『建国方略―実業計画』と題し、一九二二年一月一日付け孫文中文自序をもち、上海の民智書局から上梓される。自序によると、中文訳者は朱執信、廖仲愷、林雲陔、馬君武の四名である。これも、孫文の原稿執筆の進展に応じた訳業のリレー式的分担と考えられる。民智書局版は、一九二三年再版、二三年三版と版を重ねる。英文版は、本文で触れたように、G. P. Putnam's Sons より一九二二年にロンドン、ニューヨークでも刊行される。この『実業計画』の執筆、刊行、版本に関する考察は、狭間直樹氏の京大人文研の研究班での報告、孫文の『実業計画』と中国近代の都市と農村（一九九三年九月二五日発表）に多くの示唆を得ているものである。

(17) Linebarger, J. "Conversation with Sun Yat-sen". 但し、未公開。羅剛著、薄永敬校訂前掲書、第五冊、三四六〇―三四六一頁に依る。

- (18) 『中華字報』第五卷第一期、ただし未見。羅剛著、蔣永敬校訂前掲書、第五冊、三五七八頁に依る。
- (19) 『民国日報』一九二〇年八月七、八日。
- (20) 『東方雜誌』一七卷二四号、一八卷一号、『中華民國史事紀要』一九二二年一月一日。
- (21) 党史会編『国父全集』第三冊、六〇八頁。
- (22) 天羽英二日記・資料集刊行会編刊『天羽英二日記、資料集』第一卷、一三六一―六二頁、一四二〇頁。
- (23) 『大本営公報』第一号。
- (24) 李雲漢『中国現代史論和史料』下冊、七四二―七四三頁。
- (25) 蔣中正『孫大總統広州蒙難記』、但し原著未見。羅剛著、蔣永敬校訂前掲書、第五冊、四〇五一頁所引。
- (26) 拙稿「孫文のアジア観」、孫文研究会編『孫文とアジア』汲古書院、一九九三年。